

ABIC 国際社会貢献センター

Information Letter

No. 71 2024年12月

自治体・中小企業支援	県内企業の海外進出サポートに日々情熱を注ぐ！……………	2
	JETROハンズオン支援に参画して……………	3
教育支援	外大生へのメッセージ……………	4
	和歌山県の高校と中学で講演して……………	5
	高校生国際交流の集い2024……………	6
	アメリカ・カナダ大学連合日本研究センターでの就職活動支援……………	7
日本語学習支援	パキスタンの大学生へのオンライン日本語指導……………	8
留学生支援	東京国際交流館での活動……………	9
	兵庫国際交流会館での活動……………	9
国際イベント協力	神戸2024世界パラ陸上競技選手権大会 ―ボランティア活動を通して―……………	11
事務局だより	会員懇親会を開催……………	10
	会員の種類……………	12
	法人・個人正会員／賛助会員一覧、活動会員数……………	12
	賛助会員入会のお願ひ……………	12

特定非営利活動法人 国際社会貢献センター (ABIC)
Action for a Better International Community

www.abic.or.jp

〒100-0013 東京都千代田区霞が関3-2-1
霞が関コモンゲート西館20階
Tel : 03-6268-8604 Fax : 03-6268-8652
e-mail : mail@abic.or.jp

(関西デスク) 〒541-0053 大阪市中央区本町4-4-24
住友生命本町第2ビル9階
Tel : 06-6226-7955
e-mail : kansai-desk@abic.or.jp

自治体・中小企業支援

県内企業の海外進出サポートに日々情熱を注ぐ！

すなはら こういち
砂原 幸一（元 三菱商事）

2016年6月末に三菱商事を定年退職後、5年間勤務していた私大の就活アドバイザー職を辞め、今後の就職先を検討していた。元々海外関係の仕事をしたかったところを、母の介護絡みで出張のない大学職員となったが、この5年の間に母が亡くなり、再度海外関係の仕事をしたいとの思いが強くなっていた。

ちょうどその頃、三菱商事の先輩の勧めもありABICに登録、数ヵ月後に高知県産業振興センターで海外支援コーディネーター職を公募しているとのメールをもらった。大学退職後最初のチャレンジとして軽い気持ちで応募してみようと思い立ち、1次の書類審査に通り、2021年11月に2次試験（面接）で初めて高知を訪問した。

調べたところ、偶然ながら、三菱商事の先輩が退職するのに伴う後任の公募であることが後で分かったが、初チャレンジで受かる保証もないので、先輩には迷惑にならぬよう挑戦することだけを伝え、合格が確実になるまでコンタクトを避けた。2次試験に通り、高知に単身赴任することになり、海外転勤経験は数回あるものの、東京生まれ東京育ちの自分が国内他県で単身赴任生活を送ることに当初不安があったが、先輩の手厚いアドバイスもあり、腹を決め、2022年1月11日より勤務を開始し、現在3年目となる。

仕事内容は県内ものづくり企業の海外進出に対する支援が主で、相談のあった企業を個別に訪問しながら、各企業の強み・弱みを深く理解し、海外進出の段階に応じた具体的なアドバイスを行うことに加え、海外展示会（ベトナム、タイ、フランス等）に県内企業を伴って出展し、ビジネスの種をまいて企業マッチングの機会を追求する等のお手伝いを行っている。

高知県内の中小企業には、土佐和紙、土佐打ち刃物のように伝統を継承しながらも市場に適合して製品・技術を磨いた企業が比較的多くあり、進出希望国の市場にはまれに商談が進展するケースも多い。一例として、2度のパリ

でのMaison et Objet出展を契機に、フランスの高級ブランド系ホテルから受注したケースもある。高知に来て、仕事でフランスとの関係ができて、三菱商事時代のフランス留学や駐在員



フランス三菱で昔の仕事仲間と

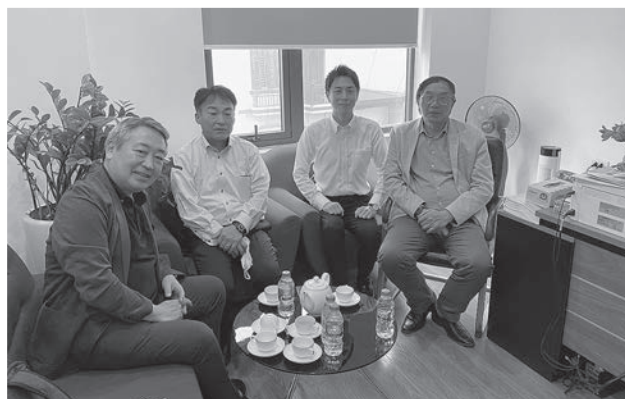
時代の北アフリカやフランス等々でのビジネス経験で培ったノウハウが活用できるケースに恵まれることになるとは、当初は全く予想していなかった。

仕事の話ばかりになったが、高知は気候が温暖で、最近では台風が通過するケースもめっきり減り、また、食材面ではカツオを中心とした魚介類、土佐の赤牛、地元の新鮮な野菜、果物などに恵まれているのに加え、土佐酒も18の酒蔵が県内に点在しており、飲食の楽しみも格別である。高知市内にはひろめ市場という酒飲みには有名なスポットもある。

元々、お遍路さんを受け入れて、おもてなしをする「お客文化」が県内に根付いており、着任当初「高知との関わりはあるのか？」「酒は飲めるか？」の2点を頻りに質問されたのは、このお客文化が背景にあるとしばらくして合点がいった。事務所内は当然ながら、どこに行っても皆さんが土佐弁で話すのには当初かなり戸惑い、聞き取れるものの意味が分からないケースもあったが、今ではよほどの例外を除いてコミュニケーションの問題はなく、酒席等を通じて温かく迎えていただけたおかげで、東京出身の私もすぐに環境に溶け込めた。



パリ Maison et Objet 展示会での高知県ブース



ベトナムでの訪問先にて（左端が筆者）

JETROハンズオン支援に参画して

あゆかわ 鮎川 やすゆき 泰之 (元 artience)

2023年度、2024年度と、ABICを通じ、JETRO（日本貿易振興機構）の「新輸出大国コンソーシアム」ハンズオン支援のパートナーを務めている。これは、全国から採択された1,000社余りの中小企業が推進する海外進出プロジェクトで成果を出していただくため、海外ビジネスの専門家といわれるパートナーが一人一人、それぞれの強みのある地域、業種に応じて1年間伴走支援するというものである。私は長年の化学メーカー勤務のほとんどで海外事業に携わっており、ベルギーとフランスに、それぞれ営業、経営という立場で、延べ10年半にわたり駐在した。その後60歳を期に退職し行政書士として独立、その際、自らの海外ビジネスの経験もお役に立てたらと、ABICの会員に登録した。折よくすぐに当ハンズオン支援のパートナー募集の話があり、応募した結果、このような形で務めることとなった。

私は現在、山梨、滋賀、鳥取、島根、愛媛の各県の地場食品業界の企業の輸出プロジェクトを支援している。人脈や情報を提供し、海外進出に対するアドバイスをしながら、月一度のオンラインミーティングで進捗を管理して、各企業が計画に掲げる成果の達成を図るものであり、一年に一度は各企業を訪問し、事業の現場を確認させていただいている。企業の皆さまはご自身の事業・商品・地域に対する思いがあり、それらをもって欧州やアジア市場へ参入し、事業の発展につなげようと情熱を傾けられている。しかし、海外事業の経験もさることながら、食のような消費財ビジネスでは認知・ブランドという部分も不可欠であり、各市場において一から構築しなければならない。そのような中で、各国での販路開拓、そして商談、実績化、さらに時には現地バイヤーとパートナーシップを組み、認知度向上を



企業訪問（左が筆者）

進めていく、ということになる。例えば、まず突破すべき販路開拓ですら、JETROの情報網、さらに私自身の人脈も駆使し、企業のイベントに積極的に参加するなどして、やっと2-3件が成立するといった具合であり、わずかな進捗のためにも非常にやる事が多く、成果達成まで時間を要する。企業も私も毎年度末までというタームを非常に短く感じている。

今の日本では、優れた品質、伝統的な産業のレベルの高さは依然世界屈指のものであるが、多くの産業、特に第2次産業のようなリアルな産業の市場は残念ながら縮小傾向にある。一方、特に食などの市民消費生活関連については、日本の商品は海外各市場で大変ポピュラーなものとなり、その需要もブームといえるほどに拡大を続けている。このような中で中小企業の皆さまが海外各市場に進出されることは必然のことといえる。中小企業の海外進出については、その知名度・認知度が決して高くない点、人的資本や投下し得る資本も限られている点など、課題が多いことも事実であるが、それだけに商談が進み、実績化ともなれば企業にとって得ることも多く、その喜びも格別なものとする。JETROのハンズオン支援プロジェクトのパートナーの職を通じて、こうした支援する中小企業各社に成果を上げていただきながら、業績向上・グローバル化といった部分で貢献し、その積み重ねによりわが国の経済の活性化を中小企業の現場から実現することができれば、と思う。



日本屈指の清流、島根県高津川
この源流をテーマにした日本酒の欧州への輸出を計画している企業も支援

教育支援

外大生へのメッセージ

はじめに

1997年に夫のロンドン赴任が決まり、家族みんなで渡英した。2018年に帰国するまで暮らした21年間は貴重な体験の連続だった。2023年から2024年にかけて、ABICから名古屋外国語大学で講義をするお話をいただき、この体験を基に、外大の学生が興味を持ってそうな内容を考えた。実は私も外大生だった。アラビア語専攻でチュニジアに短期留学したものの、特に就職に有利になるとは思えず、卒業を前にして、英語が少しも上達していないことに焦りを感じていた。「英語を使う仕事」をしたかったが、それはどのような仕事なのか、よく分からなかった。そこで、そうした私の学生時代の経験を踏まえて、「英語の上達法」と「英語を使う仕事」について話すことにした。また、21年間の英国滞在で知ることができた、「英国という国」についても話すことにした。具体的には以下のような講義をした。

英語の上達法

私が大学で取得した資格は、英語の教員免許と英検2級だけである。通勤電車の中でアガサクリスティの推理小説を読んで英語力を保持した。数年後、ケンブリッジ英検のProficiency級に合格、続けて英検1級も取得した。ところが、後に渡英してみるとBBC Newsの英語が半分も分からない。がくぜんとした。日常会話すらままならない。本場の英語は難しかった。加えて、日常の雑事が日本のようにスムーズに運ばない。交渉事や、苦情を申し立てる場面が非常に多い。最初は、いちいち頭の中で英作文をしてから「戦い」に臨んだ。その場でいきなり文句を言えるようになったのは数年後だ。特に電話は不安だったので、聞き取れた内容をレポートして相手に再確認してもらった。連日レポートしていたら聞き取れるようになってきた。聞き取れるようになったら自動的に話せるようになった。Speakingの上達には読み書きも大切だ。小説や新聞を毎日読んでいたおかげで、会話の中で耳にする単語や表現がしっかりと頭に残った。今でも、知らなかった表現を耳にした瞬間は、どれも鮮明に覚えている。数年後、キングス



霧のロンドン

トン大学大学院で美術史を、

英語学校講師 **くもん 九門 みさき** (元 ロンドン補習授業校)

そして、ロンドン大学大学院でアラビア文学を学んだ。大学院の授業は学生主導型で、プレゼンとディスカッションが中心である。専門書を読んでエッセーと修士論文を書く。英語の4技能が自然と身に付いた。



タワーブリッジを背景に

英語を使う仕事

新卒で文房具の輸出営業、バーレーン日本人学校で英会話の講師、翻訳会社で洋書のシノプシス作成、ロンドン補習授業校では10年間担任を務めた。そして帰国が決まり、英語学校中心に就職活動をした。しかし、すでに一般的なリタイア年齢に近い。仕事があるのか不安だった。それで、翻訳者も選択肢に入れて、法律翻訳の通信教育を始めた。だが、法律知識ゼロの私がプロになれるわけがない。そもそも日本語の文章力も怪しい。マイナス要因ばかりだった。ところが、東京に着いてみると、案外、すぐに採用が決まり、資格英語を教える講師として、英語学校の他、大学や高校、企業にも派遣されて大忙しとなった。それから6年間、今も英検、TOEFL、IELTS、TOEIC等を教えている。生徒の年齢は小学生から社会人まで幅広く、学ぶ目的もさまざま。英国生活の中で吸収した実践英語と大学院での勉強が役に立つ。法律翻訳の方は、チェッカーとして、契約書の翻訳文を校正する仕事を請け負った。

英国という国

英国社会が抱える問題とこの国の素晴らしさについて、英国の社会制度や年中行事も含めて、動画を見せながら実体験を語った。大都市ロンドンには、移民という異物をクールに受け入れる伝統と寛容さがある。大学もそうだ。外国人で50代の私を、20代の学生と区別せずに、厳しく丁寧に指導してくれた。留学生にとって最高の環境だと思う。

最後に

この講義で、英語を学ぶことと、外国で暮らすことの面白さを伝えたかった。学生たちの将来に少しでも役立てばうれしい。

教育支援

和歌山県の高校と中学で講演して

神戸大学名誉教授、摂南大学名誉教授 **くぼ ひろまさ** 久保 広正 (元 丸紅)

ABICより和歌山県立田辺高等学校および田辺市立新庄中学校で講演する機会を頂いた。テーマは、田辺高校では「世界平和に貢献する日本人」、新庄中学校では「大学で取り組んでいるSDGs」である。いずれも、私が神戸大学および摂南大学で研究と教育に携わっていた分野に関係するため、喜んでお引き受けした。

6月19日、田辺高校では、まず、世界平和に貢献した2人の日本人を紹介した。1人目は、欧州統合の理念を主張した青山栄次郎（別名リヒャルト・クーデンホーフ＝カレルギー。ハインリヒ・クーデンホーフ＝カレルギーと青山みつの次男）であり、彼の思想が第2次世界大戦後、欧州統合を通じて欧州の和解・平和をもたらしたことを説明した。2人目は、戦前の外交官・杉原千畝であり、第2次大戦中、ナチスによる迫害を受けつつあったユダヤ人に対し、幾多の困難を乗り越え日本通過ビザを発給し、6,000人近くの命を救ったことを説明した。

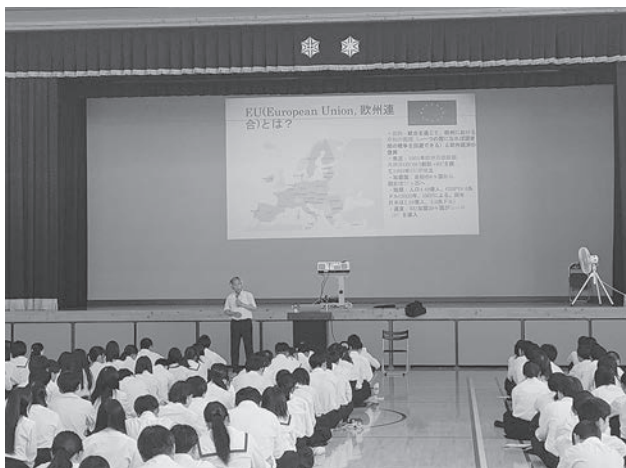
次に、欧州の平和実現を主たる目的の一つとするEUの高等教育政策を紹介した。その政策の延長線上で、私が総代表となり日欧大学コンソーシアム（神戸大学・大阪大学・九州大学など日本側4大学、ルーヴェン大学など欧州側6大学）を組成し、双方の留学生交流を実現したことなどを説明した。

翌日の6月20日、新庄中学校では、SDGsに関する大学の取り組みについて紹介した。まず、私が神戸大学の大学院で指導した卒業生を摂南大学に招聘して、SDGsの目標6（安全な水とトイレを世界中に）に関する講演会を開催し、その卒業生から国際協力機構（JICA）に勤務しアフリカで井戸を掘る事業に携わった経験を報告してもらった

ことを紹介した。彼がアフリカで住民に対し、清潔な水が健康にとり重要ということを幾度となく説明し、住民の協力により井戸を完成することができたこと、その結果、当該地域の幼児死亡率が激減する一方、水くみ・水の運搬から解放された子供たちが通学できるようになり、友達がたくさんできたことなどを説明した。

次に、SDGsの目標11（住み続けられるまちづくり）に関連し、同県すさみ町における摂南大学生の提案について紹介した（すさみ町と摂南大学は包括連携協定を締結しており、毎年、多数の摂南大学生が同町を訪れ、町おこし活動に携わっている）。提案の内容とその背景は以下の通りである。同町では人口が減少しており、このままでは人口減→税収減→歳出カットが必要となり、その結果、ますます町の魅力が低下し、一層の人口減を招く可能性がある。このため、摂南大学生は町に対して次のような提案を行った。まず、町の予算でスマート・ウォッチを購入し、全住民に配布する。次に、住民はスマート・ウォッチで毎日の歩数を計測し、町に報告する。次に、町はこの歩数に応じて同町内のみで通用する地域通貨を発行し、住民はこの地域通貨を町内の商店で使用する。つまり、住民はより多く歩くことで健康を維持し、町は医療関連予算の削減が可能となり、町内の商店は売り上げを増やすことができる、という提案である。なお、摂南大学生はこの提案を2017年に通貨に関する学生のアイデアを競う日本銀行主催の「日銀グランプリ」で発表し、最優秀賞を受賞している。

最後に、摂南大学は、すさみ町に住み続けることができる町にするため、今後もさまざまな努力をしていくことも力説した次第である。



田辺高校での講演



新庄中学校での講演

教育支援

高校生国際交流の集い2024

関西デスクコーディネーター **いたくら なおと** **板倉 直人** (元丸紅)

8月8-9日、猛暑という言葉が似合う真夏の関西学院大学西宮上ヶ原キャンパスに、2024年で18回目となる「高校生国際交流の集い」に参加する高校生と留学生が集まった。

このイベントは、関西学院大学研究推進社会連携機構のスタッフと同大学の学生組織KGIH (Kwansei Gakuin Global Inspiration with Highschool) のスタッフが年初からABICを含めた関係者と連携を取りつつ準備してきたものである。2024年は神戸市立葺合高等学校、兵庫県立兵庫高等学校、兵庫県立宝塚西高等学校、兵庫県立国際高等学校、大阪府立箕面高等学校、大阪府立豊中高等学校、大阪府立千里高等学校、啓明学院高等学校、関西学院高等部、帝塚山学院高等学校の10校から計43人の高校生が参加した。また、スイス、チリ、米国、フランス、ハンガリー、コロンビア、ミャンマー、メキシコ、フィンランドの9カ国から計14人の留学生が参加し、KGIHからは27人のスタッフが参加した。ABICからは1日目は岩田事務局長と関西デスクのコーディネーターが私を含め5人全員参加し、グループディスカッションにおける個人賞の審査を行った。2日目は岩田事務局長と私が参加し、プレゼンテーションでの審査を行った。

2024年のイベント・スローガンは「Everything Starts with an Idea ~1つのアイデアで世界を変える~」で、関西学院大学副学長・研究推進社会連携機構長の土井教授に

よる開会スピーチ、教育学部米崎准教授による英語教育に関する講演でイベントがスタートした。

午後から高校生・留学生たちは八つのグループに分かれ、事前にピックアップされていたSDGsの課題の解決策について、本格的なディスカッションを開始した。2日目に入ると、KGIHスタッフのアドバイス等も受けながらパワーポイントによる資料作り、発表内容・方法の具体的な詰めを行い、最終プレゼンテーションに向けた準備をグループ一体となって行っていた。

閉会式では、岩田事務局長によるスピーチの後、審査結果が発表され、上位入賞グループおよび個人賞受賞者に表彰状と賞品が授与された。特に今回より新設された個人賞授与では会場全体が非常に盛り上がった。次いで、関西学院大学社会連携・インキュベーション推進センター長の片山教授より参加者全員に修了証が授与された。

当初はKGIHスタッフの人数不足が懸念されたが、最終的にはプロモーションが奏功して数多くの新メンバーが加わり、貴重なアドバイスを高校生・留学生たちに与えていた。KGIHスタッフの情熱が、プレゼンテーションのクオリティの高さや交流の集い全体の盛り上がりをもたらしていたと感じた。今回、初めてABIC関西デスクのコーディネーター全員が本イベントに参加したことは意義深く、2025年はさらに大学関係者およびKGIHスタッフとの連携を深めていきたい。



総合1位となったGグループ



参加者全員で

アメリカ・カナダ大学連合 日本研究センターでの就職活動支援

たなか こういちろう
田中 孝一郎 (元 Citibank, N.A.)

私は2016年末、36年間の会社員生活を終え退職した。退職後はキャリアコンサルタントを目指しながら、漠然と人材教育・育成の分野で社会貢献したいと考えていたが、何をどのようにすれば良いか分からず悩んでいた時、勤め先の先輩でありABIC会員である松岡さんの紹介でABICの活動を知り、2017年5月に活動会員として登録した。

2017年10月に国家資格キャリアコンサルタントとして登録することができ、まず神奈川大学就職課・就職支援センターにて、就活アドバイザーとして学部生および大学院生へのキャリアカウンセリング業務を経験した。その後、国立大学法人電気通信大学にて、キャリア教育特任講師として3年半勤めた。その間、ABICの紹介で聖学院大学にて前職の関連から国際金融論の講義を3人の講師と共にオムニバス形式で5回担当した。

電気通信大学退職後しばらく母の介護のため教育の現場から離れていたが、2023年末にABICよりアメリカ・カナダ大学連合日本研究センター（以下、IUCと略す）にて学生の日本での就職活動を指導・アドバイスする非常勤講師職の案内があり、これに応募したところ、面接を経て採用となった。

IUCは主に北米の大学生・大学院生等を対象に中・上級日本語教育を行う機関である。学生はIUC卒業後帰国し、日本研究の専門家や日本関係の実務家への道を進む者もいるが、日本に残って就職を希望する学生も毎年10-20人程度いるので、このような学生を対象に2月から6月末までの選択授業の一つとして、就職活動を指導するクラスを設けるとのことであった。私の役割は、毎週金曜日の午後、日本での就職活動の仕方（例：履歴書・エントリーシート・職務経歴書の作成方法、面接の受け方、情報収集、就職希



座学での授業

望先へのコンタクトの仕方など) について授業を行うとともに、就職活動のアドバイザーとして学生個々の相談に乗るというものであった。

今回IUCとして初めての試みであり、講座の目的・到達目標等を担当教員の方々と話し合いながら授業を開始した。

2-3月は座学を中心に授業を行い、日本企業の採用方法や就職活動成功へのポイントを説明し、特に学生にとって難しいと思われる(1)求人情報収集方法、(2)応募書類の種類および書き方、(3)面接試験対応等をペア・ワークやグループワークも取り入れながら授業を進めた。4月からは個別相談の形式で学生個人別に指導を行い、履歴書・エントリーシート・職務経歴書の書き方や内容の添削・アドバイスをを行った。金曜日の1人30分枠の個別指導はほぼ毎回予約がいっぱいとなり、学生たちがいかに日本での就職を切望しているかを実感した。

6月7日に2023-2024年度学生の卒業式を迎えた。卒業生一人一人、パートンIUC所長と握手を交わし満面の笑顔で卒業証書を受け取る学生もいれば、感極まり涙ぐみながら卒業証書を受け取る学生もいて、感動的な場面に立ち会うことができうれしかった。また、就職活動支援授業を受講した学生のうち、既に企業から内定を取得できた学生たちがうれしそうに報告に来てくれた。今回の就職活動支援授業はIUCとして初めての試みであり手探りで始めたが、少しでも学生たちの就職活動の手助けができたのであれば幸いだ。IUCの学生の日本語能力レベルは非常に高く、非常勤講師として毎週学生に会うことを楽しみに充実した時間を過ごすことができた。このような機会を与えてくれたABICならびにIUCに感謝する次第である。



個別相談

日本語学習支援

パキスタンの大学生へのオンライン日本語指導

小中高校国際理解教育グループコーディネーター **坂本 英樹** (元 日商岩井)

2023年9月に、パキスタン大使館よりラホールにある Superior大学の主にITを専攻する学生向けに日本語を指導してもらえないかとの依頼を受けた。大学側の担当者と協議を重ね、オンラインで日本語指導を行うプログラムを策定し、2024年2月より7月初めまで、週3回、1回2時間の授業を行った。日本語を学ぶ目的は、将来日本で働くために、日本語能力試験（JLPT）N4レベルの日本語を習得することであった。受講する学生は17人、日本時間16時と20時から始まる2クラスに分け、ABIC会員6人が授業を担当した。日本語指導を行うに当たって一番の苦勞は、学生がまったく日本語に触れたことがないゼロビギナーであったこと、さらに対面ではなくオンラインで授業を行ったことであった。オンライン授業を始めて1ヵ月半くらいたったころ、学生の習熟度を確認する必要があると思い、GW期間にラホールを訪問し対面で授業を行うこととした。パキスタンへの渡航については、大学側は安全管理に万全を期すということだったが、ABIC内では商社関係者などから情報収集を行うなど慎重な検討がなされ、最終的にゴー

サインが出た。

4月26日から5日間、学生と対面授業を行った。学生11人は毎日4時間、休むことなく出席し、習ったことの復習とJLPTの模擬試験を行った。オンラインと違い、学生の表情を見ながら授業を行うことができ、学生からの質問も多く、有意義な5日間であった。最終日には「合格」という鉢巻きを巻いて授業に参加していた。ランチを一緒に食べたり、大学の様子などの話を聞いたり、学生との交流は楽しく、安全面も大学側が配慮してくれてまったく心配なかった。5月、6月とオンライン授業を続けたが、6月は大学の期末試験と重なり欠席者も多く、最後の追い込みの授業は残念ながら不十分であった。11人がJLPTのN4を受験、結果は合格点の約6割の得点であったが、ゼロビギナーかつオンライン授業の結果としては健闘したといえる。学生からも「日本語に触れる機会を頂き、ありがとうございました」というメッセージが届き、講師一同うれしい気持ちになった。



ラホールでの対面授業



合格鉢巻きを巻いた受講生（中央が筆者）

日本語講師 **中澤 ゆり** (なかざわ)

ABICの日本語教師養成講座を受講した経緯から声を掛けていただき、5人の学生を担当した。授業では副教材として英訳付きのPPT資料を自作し、日本語で説明が難しい場面では英語で対応した。1人の学生は日本に大変興味を抱いており、日本の好きなところをよく話し、毎回積極的に授業に参加してくれた。一方悩ましかったのは、いかにクラスの雰囲気コントロールし学生を巻き込んでいくかということであった。対面式よりも空気が読みづらく、なかには授業の途中でいつのまにか退室してしまう学生もいた。また現地のネット環境の都合上、やむを得ず学生側のカメラ機能をオフにすると、学習状況がさらに把握しにく

くなるという点も悩ましかった。

短時間での効率的な教え方や学生の意欲の上げ方など試行錯誤の連続であったが、養成講座の先生方よりご教授いただいた「シンプルに教えること」を念頭に置きつつ、学生の心の機微を感じ取ることを心掛けた。プログラム終了後、学生からのメッセージの中で「日本語の授業は新しい世界へつながるドアを開けてくれました」という言葉を目にした時には、何ともいえない温かい気持ちになった。彼・彼女たちの人生のどこかで日本語を学んだという経験が役立つことを切に願っている。

留学生支援

東京国際交流館での活動

留学生支援グループコーディネーター **みやこ 宮子** **かずこ 和子** (元 住友商事)

ABICは留学生・家族の居住施設である東京国際交流館(TIEC)において、日本語広場、日本文化教室、春・秋のバザー、国際交流フェスティバルでの日本文化体験教室、さらにTIEC居住者の育児相談・新生児訪問通訳など、さまざまな支援を行っている。

日本語広場

4クラス(初級Ⅰ、初級Ⅱ、中級、上級)に分け、日曜日を除く毎日(上級は週2日)、日本語を教えている。初級Ⅰクラスは、国際交流基金がウェブで公開している「いろいろ入門」を2023年10月から教材に取り入れている。同一教材の使用により参加者の進捗状況が把握しやすくなった。初級Ⅱクラスは、中級レベルに近い参加者もいるので、顔触れを見て教材を駆使している。中級クラスは最近、会話の学習を希望する参加者が多く、タイムリーなテーマを選んで会話を教えている。上級クラスは、日本の著名な作家の作品を読み、意見を交わし合ったりしている。

初級Ⅰ、初級Ⅱ、中級は金曜日にオンラインクラスを設けている。大学の研究室にいながらや育児に携わりながら

など、それぞれの生活に合わせて参加できるので好評となっている。

今後とも、日常生活に役立つ日本語を学び、日本の生活を楽しんでもらいたいと考えている。

日本文化教室

原則月1回、茶道、華道、書道、将棋、囲碁、空手の各教室を開催している。茶道、華道、空手は特に人気が高い。書道では、漢字は難しいけれども筆使いが楽しいという声を聞く。囲碁では、アプリを取り入れたりして興味を引くようにしている。将棋は参加者が少ないが、10月は8人も参加してくれ、驚きとともにうれしさがあった。今後も継続して参加してくれることを願っている。

国際交流フェスティバル

10月26日(土)に開催された国際交流フェスティバルでは、華道、書道、空手の体験教室を実施した。家族連れの地域住民やジンバブエ、バングラデシュ、カナダなどからの留学生、延べ約70人に楽しく日本文化に触れてもらった。



日本語広場

国際交流フェスティバルでの
華道体験教室国際交流フェスティバルでの
空手体験教室

兵庫国際交流会館での活動

関西デスクコーディネーター **かしむら かのる** **鹿志村 馨** (元 住金物産)

日本語広場

参加者はアフリカからの留学生が多く、次いで、南米(ブラジルほか)、アジア(フィリピン、カンボジア、ミャン

マー、インド、バングラデシュなど)からが増えており、中国、韓国、台湾からは以前より少ない。アフリカからの留学生は初級者が多いため、初級クラスの参加者が増えて

留学生支援

いる。また、2023年あたりから、退館後も継続して受講するケース、その友人などが受講するケースが多く見受けられる。日本で就職を目指す留学生が増えているため、日本語能力試験（JLPT）でN2を取得すべく熱心に受講している。中級、上級の留学生向けには、就職に役立つ講義内容になるように配慮しており、この傾向は今後も継続すると思われる。

日本文化教室

日本文化教室で人気のある華道は、修了証の取得に向け熱心に参加する留学生が多い。中国、米国、英国、コートジボワール、コロンビアなどからの留学生のほか、2023年の国際交流フェスティバルの体験教室に参加してくれた日本人の小学生も特別に受講を認められ、すでに初等科の

修了証を取得している。空手は、退館後に日本で就職したトーゴ出身の社会人が、講師の指揮の下、積極的に後輩の指導に当たってくれている。また、新たにモザンビーク、インド、中国からの留学生が加わり、明るさが出てきた。書道は、これまでタイと中国からの留学生数人だったが、このところ非漢字圏のベニン、セネガルからの留学生が熱心に参加してくれている。

秋期新入館生ウエルカムパーティー

10月12日（土）に開催されたパーティーは、世界17カ国・地域から新入館生46人を迎え、琴の演奏や樽酒の鏡割もあり、大いににぎわった。ABICも大学関係者と共に招待を受け、日本語講師5人と事務局が参加した。



日本語広場



華道教室



空手教室

事務局だより

会員懇親会を開催

2024年9月25日（水）、霞山会館（千代田区霞が関）において会員懇親会を開催し、活動会員、法人・個人正会員、役員、日本貿易会関係者など約110人にご参加いただきました。安永会長の開会あいさつ、宮本理事長の乾杯発声に始まり、会員の皆さまに和気あいあいとご歓談いただき、盛会のうちに閉会しました。



安永会長



宮本理事長



懇親会風景

国際イベント協力

神戸2024世界パラ陸上競技選手権大会
—ボランティア活動を通して—こう
黄 なおこ
直子 (元 パルチラジャパン)

私は2015年より神戸市の地域コミュニティーセンターで日本語サポートのボランティアをしている。定年退職を機に活動の場を広げようと思っていた矢先、知人を通じABICの紹介を受け活動会員に登録した。2024年1月より兵庫国際交流会館で留学生向けABIC日本語広場の初級クラスを担当している。外資系ホテルやメーカーで外国人と接してきた経験を生かし、日本語学習支援のみならず、異文化理解への橋渡しにも貢献できるよう努めている。

2024年5月17-25日に神戸2024世界パラ陸上競技選手権大会が神戸総合運動公園ユニバー記念競技場で開催された。104カ国・地域から約1,000人のトップアスリートが集結し、日本全国から約1,500人のボランティアが参加した。私も神戸市のボランティア募集（ABICからも周知があった）に応募し、その一員として活動した。期間中は主にメディアセンターサポートとして、(1)世界17カ国から来日したメディア関係者の入場受付、(2)プレスセンターでの配布物の補充・整理、(3)競技会場内記者席での補助、(4)競技終了後に選手がメディアの取材に対応するミックスゾーンでの補助などを行った。

今大会では、168種目が実施された。肢体不自由、視覚障がい、知的障がいなど、障がいのある部位や種類はさまざまなため、細かくクラス分けされていた。クラス分けは、例えば「T63」などアルファベットと2桁の数字記号で表記される。アルファベット表記には「T」と「F」があり、TはTrack（走競技、跳躍競技）、FはField（投てき競技）を意味する。数字記号は10-60番台まであり、10の位は障がいの種類を示している。60番台は競技に義足を装着して出場する競技者を表す。1の位は障がいの程度を0-9の数字で示し、数字が小さいほど障がいの程度は重くなる。

各競技の「クラス分け」や、パラ陸上の独自種目である「こん棒投げ」「ユニバーサルリレー」などを知り、陸上競技用車いすの「レーサー」や「投てき台」を実際に見て、パラスポーツへの興味や関心が高まっていったことを思い出す。

本大会のテーマの一つである「インクルーシブな社会の実現」とは、異なる背景や属性を持つ人々が互い



競技会場でチームメンバーと（右から2人目が筆者）

に尊重され、平等な機会を享受できる、包括的な社会を築くことである。兵庫県内の小・中・高校・特別支援学校から約3万人の子どもたちが競技場を訪れ、メディアセンターの前を通り過ぎる時には「おはようございます」「ありがとうございました」と元気にあいさつしてくれた。子どもたちが競技を見て感じたことが、学校では先生や友達と、家では家族と話すことを通じて、共生社会へと続く意識や行動の変化のきっかけになっていることを願いたい。

印象的だったのは、ボランティアメンバーには東京オリンピック・パラリンピックのボランティア経験者が多く、彼・彼女らが率先してリーダーシップを発揮してくれたことだ。まさに「ボランティア精神の継承」そのものであった。また現役の社会人も多く、休暇を取って遠方から神戸まで来ている人も少なくなかった。彼・彼女らはボランティア活動を気負いなく、自然にライフスタイルの一部に組み入れているように思えた。「またどこかで！」と笑顔で解散していく姿は、私を含め地元のメンバーにすがすがしい余韻さえ残してくれた。

うれしいサプライズもあった。ABIC日本語広場の受講者のエレナさん（マレーシア）とジャックさん（英国）ご夫妻が参加していたことだ。二人とも語学サポートとしての参加だったが、チームメンバーや大会関係者とは日本語でコミュニケーションを取り、日頃の学習成果をしっかりと発揮していた。

アスリートの皆さんの「カッコよさ」にもすっかり魅了されてしまった。障がいがあることなど全く感じさせない躍動感や力強さに加えて、この上なく優しく明るい笑顔が今も私の目に焼き付いている。またボランティアのチームで出会った仲間との温かい交流など、本当に貴重な経験をさせてもらい、心から大会関係者に感謝したい。そして、今回のボランティアで得られた「絆」をこれからも大切にしていきたい。



エレナさん&ジャックさんご夫妻

会員の種類

種類	内容	年会費
正会員	センターの目的に賛同し、活動を推進し、会費を納める個人、法人および団体。(理事会の承認を得て入会)	法人および団体 1口 50,000円
		個人 1口 10,000円
賛助会員	センターの目的に賛同し、会費を納める個人、法人および団体。	法人および団体 1口 10,000円
		個人 1口 5,000円
活動会員	センターの目的に賛同し、活動に参加しようとする個人。	なし

(2024年10月末現在)

正会員

法人・団体（17社、1団体）〈社名・団体名五十音順〉

- 〈10口〉 伊藤忠商事(株) 住友商事(株) 双日(株) 豊田通商(株) (一社)日本貿易会 丸紅(株) 三井物産(株) 三菱商事(株)
 〈2口〉 稲畑産業(株) 岩谷産業(株) 長瀬産業(株) 日鉄物産(株) 阪和興業(株)
 〈1口〉 兼松(株) 興和(株) 三洋貿易(株) JFE商事(株) 蝶理(株)

個人（12名）〈敬称略・氏名五十音順〉

- 〈3口〉 中村邦晴
 〈1口〉 池上久雄 市村泰男 岩城宏斗司 岡 素之 國分文也 小林栄三 小林 健
 佐々木幹夫 寺島実郎 宮原賢次 吉田靖男

賛助会員

法人・団体（2社、1団体）〈社名・団体名五十音順〉

- 〈2口〉 (公社) 東京のあすを創る協会
 〈1口〉 (有)イーコマース研究所 (株)エックス・エヌ

個人（170名）〈敬称略・氏名五十音順〉

- 下記は2024年6月以降にご入会いただいた方々です。
 〈2口〉 安藤元厚 福田定直 〈1口〉 菅原信夫

活動会員 3,006名

賛助会員入会のお願い

ABICの目的にご賛同いただき、資金的な援助をしていただける活動会員およびその他の個人の方、
 ならびに法人および団体の皆さまのご入会をお願い申し上げます。

会員入会のお問い合わせ・連絡先

特定非営利活動法人 国際社会貢献センター (ABIC)

〒100-0013 東京都千代田区霞が関3-2-1 霞が関コモンゲート西館20階

TEL : 03-6268-8604 FAX : 03-6268-8652 E-mail : mail@abic.or.jp